

松本清張「断碑」の起源とその意義

松本, 常彦
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4776953>

出版情報 : 語文研究. 130/131, pp.371-387, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

松本清張「断碑」の起源とその意義

松 本 常 彦

一

松本清張の小説「断碑」は、考古学者の森本六爾(注1)をモデルにした小説で、初出は「別冊文藝春秋」(昭和二十九年十二月二十八日)、初刊は角川小説新書の一冊『風雪』(昭和三十一年十一月五日)である。初出のタイトルは「風雪断碑」であったが、初刊本所収時に「断碑」と改題された。

『風雪』は、巻頭に「断碑」を配し、「石の骨」、「笛壺」、「菊枕」、「父系の指」、「或る「小倉日記」伝」を収める。前の三作は考古学者や歴史家を、後の三作は、杉田久女、自分の父、田上耕作と自らの郷土小倉の人々をモデルとする。同書「あとがき」には、次の記述がある(〳は原文改行、以下同じ)。

この集の五つの短篇には、それぞれ私の心を仮托した人間を描いた。モデルとまではいえないが、そのモチベーションとなった人物は実在していた。〳「断碑」(「別冊文藝春秋四十三号」は若くして死んだ考古学者森本六爾のことからとつた。私は彼を調べるのに、かなりの労を費したつもりだが、書いたものはそれからかなり離れたものになった。森本六爾の生涯は誰かがいつか正確に書くであろう。私は、私なりの彼をここに書いた。(略)この五つの主人公をならべてみると、いずれも共通の性格がある。孤独の抵抗である。

『風雪』の書名は、「風雪断碑」のままなら、いかにも巻頭にちなむ印象になるが、所収作のいずれもモデル小説といっただけでなく、「風雪」の生を「共通の性格」としており、清

張の創作活動の初期に「風雪」のモチーフが底流していたと知られる。とすれば、「風雪断碑」と題された小説は、清張文学における「風雪」の系譜の点でも重要である。その「断碑」について全集「あとがき」^(注2)の記述を引く。

「断碑」は小倉にいたときから持ちつづけていた題材だった。その年（松本注・昭和二十八年）の暮から正月にかけて「断碑」の主人公である考古学者森本六爾夫妻のことをききに信州上諏訪に行き、森本氏の弟子藤森氏に会った。私はこの不遇な才能ある考古学者を調べるために今までいちばん多くの人に会っている。

「題材」の語は、作家になってからのという印象を与えるが、森本との接点は、昭和二十五年の「西郷札」による遅咲きの作家デビュー以前に遡る。「わが小説」^(注3)「断碑」を引く。

私の初めのころの作品に『断碑』というのがある。昭和三十年に書いたもので、私としては最も愛惜している小説の一つである。（略）私が初めて森本六爾の名前を知ったのは九州の職場である。そのころ、同じ部署にいた人が考古学に興味を持っていて、何かと私に話してくれたが、あるとき、とうとう森本六爾も亡くなりましたね、夫婦で考古学と討ち死にしたようなものです、と話した。当時、私は森本六爾がどのような人か知らなかつ

た。／＼しかし、この言葉がいつまでも私の心から離れなかつた。私は森本六爾のことを調べはじめた。もつとも、そのころは彼の著書だけを勉強したように思っている。

／＼昭和二十八年の暮れに、私は東京に転勤となった。このとき初めて、森本六爾の人物を調べてみようと思った。

「昭和三十年に書いたもの」というのは、初出誌の発行日とは若干齟齬するが、不自然ではない。注目したいのは「そのころ」の語である。「九州の職場」は、朝日新聞社九州支社を指すので、「そのころ」の範囲は、最も広くしても、清張が同社の臨時嘱託を始める昭和十二年から、軍隊に召集される昭和十七年十二月までになる。ただ、前者の「そのころ」は、「同じ部署」という表現から、常勤嘱託となる昭和十四年から広告部雇員となる昭和十五年あたりが想定される。後者の「そのころ」は、はっきりしないが、「そのころは彼の著書だけを勉強した」に続き、「昭和二十八年の暮れに」「東京に転勤」になり、「このとき初めて、森本六爾の人物を調べてみようと思った」となるので、傍線部の対照から、考古学に関心を持ち始めた前者の「そのころ」と重なる印象がある。

右の引用では作家以前に、森本の「著書」に触れている印象だが、藤間生大との対談^(注4)になるとニュアンスが違ってくる。

関心を持ったのは、私が小倉の朝日新聞社にいるとき、

考古学の好きな朝日新聞の社員がいて、森本六爾もとうとう亡くなったといった。(略)夫婦で考古学と討死したようなものだという。はじめはこれに小説的な興味をもった。それでいろいろ聞いてみると、森本六爾は学歴もなく(略)在野の考古学者として終わったというんです。私は東京に転動になってから森本さんの『日本農耕文化の起源』など読んだ。ずつとのちになって、森本さんの弟子筋に当る藤森栄一さんの『かもしかみち』(一九四六年、葦牙書房刊)、これは弥生式土器の編年史をつくる資料調査のために五島列島のほうまで行った、調査報告をかねた紀行文です。そういうことで、森本さんのことをだんだん知るようになりました。

これを受け、藤間が、森本の死を聞いたのは「昭和十五年六年ですか」と尋ねたのに対し、清張は「そのころかもわかりませんね。私が兵隊に行き、帰ってから戦後調べだしたと思います。」と応じている。

対談では、森本の著述を読んだのは、「東京に転動になってから」と言う一方で、「兵隊に行き、帰ってから戦後調べだした」とも言っている。前者なら「多くの人」に取材しながら森本の著述も読んだことになるが、後者には、戦前からの考古学への関心や興味からというニュアンスも残る。前者なら

「小倉にいるときから持ちつづけていた題材」という表現に疑問が生じる。後者なら「小倉にいるときから」を裏打ちするが、前者と矛盾する。また「そういうことで、森本さんのことをだんだん知るようになりました」とも言うが、この発言と「小倉にいるときから」は、どのように折り合うのか。「題材」とは、森本の死を聞いたときに抱いた「小説的な興味」に過ぎないのか。種々の疑問が生じるが、それ以上に興味深いのは、対談相手の藤間が、森本主宰の東京考古学会の「考古学」について質問していることである。

松本さんは、あの小説を読んだ範囲では、森本たちが出した雑誌『考古学』の編集後記を書いていた森本の奥さんの筆にひかれて、関心をもたれたという感じがしたわけです。それにしても、私なんかその編集後記の書いてある雑誌を見たのは最近のことで、国会図書館で見ただす。これは一般には手に入りにくいのですが、松本さんは、どうしてああいう雑誌を見られたんだらうか、いつごろだらうか、ということをお聞きしたいんですが。

藤間が「森本の奥さんの筆にひかれて」と「感じ」たのは、「断碑」本文に由来する(引用は初刊本に拠る。漢字は新字体とした。以下同じ)。

シズエは「考古学界」の毎月の後記に「編輯所日誌」

というのを連載していた。それは誰が来たとか、誰から来信があつたとかいう雑報だつたが、間には、／＼——早起。書齋の硝子戸越に見下すに紅葉霜に冴えて赤し。(略) というような簡潔な文章が挟まり、それが美しいと好評であつた。

こうした「断碑」の記述と「考古学」の森本ミツギによる「編輯所日記」の記述との照応は、松本清張記念館特別企画展図録『新進作家 松本清張 取材に走る』^(註)で報告済で、清張が「考古学」を下敷きにしたことは確実である。

藤間は「私なんか」と語るが、『埋もれた金印』(岩波新書)、『倭の五王』(同)などでも知られる日本古代史の学者である。その藤間が「雑誌をみたのは最近のこと」で「一般には手に入りにくい」という以上、「どうして」「いつごろ」と疑問を持つのは当然であろう。藤間のような人物だからこそ持った疑問かも知れない。この疑問に対する清張の返事を引く。

松本 雑誌『考古学』は、ご存じのように、東京考古学会から出して、森本さんの奥さんが編集をしていましたね。関心をもったのは、私が小倉の朝日新聞社にいるとき(以下、先の引用文に続く)

つまり「どうして」「いつごろ」には答えていない。話題は、いったん藤森の著書や取材先の人々に移り、清張が「と

いうわけで、だんだん周囲から聞いてはわかってきた。聞き書きであの小説をつくったのです。」と内幕を披露する。しかし「考古学」を実見した藤間は、やはり「どうして」「いつごろ」の疑問がくすぶつたのであろう。再び「その過程で雑誌をごらんになって……」と食い下がっている。それ以下の応答を引く。

松本 あの『考古学』の雑誌は、たしか、中島さんからお借りしたと思います。森本さんの奥さんの編集後記がとてもよくて、参考になりました。中島さんも亡くなられました。

藤間 では、死んだということを知られたときと、森本さんのことをじっさいに追求されはじめたあいだは、だいぶん時間のずれがあつたわけですね。

松本 つまり夫婦で考古学と討死したようなものだという話の記憶がどこに残っていて、いよいよ小説を書くこうとするときに、それが題材として蘇ったというわけですね。

先に「小倉にいるときから持ちつづけていた題材」と「そういうことで、森本さんのことをだんだん知るようになりました」との折り合いを問題にしたが、それは右のようなかたちでしか折り合いがつくまい。

こうした微妙な揺らぎについては、「古代史・考古学への目
覚め 朝日新聞社時代の松本清張^(注6)」を執筆した小野芳美も気づ
いていたに違いない。一連の資料を踏まえつつ「昭和）二十
六年頃から改めて森本六爾に関心を持ったと考えられる」と
述べている。そのように折り合いをつけるしかない一面があ
るが、それでも「昭和二十八年の暮れに、私は東京に転勤と
なった。このとき初めて、森本六爾の人物を調べてみようと思
った」や「東京に転勤になってから」「だんだん知るようにな
りました」とは折り合わないのである。

「改めて」と小野が言うように、朝日新聞社の社員と二足の
草鞋で職業作家となった清張が、小説の「題材」として「改
めて」調べたのは事実には違いない。しかし、森本の死に「小
説的な興味」さえ持った人間が、その著述を読まずに「兵隊
に行き、帰ってから戦後調べた」とは考えにくい。もち
ろん対談なので、記憶違いや記録違いも生じがちであるが、
清張の資質からすれば、「興味」を抱いた森本の著述を読んだ
と考える方が自然なのである。

それに、こうした揺らぎ以前に、清張の発言には根本的な
錯誤がある。平岡敏夫が指摘するように、「森本六爾が死去し
たのは昭和十一年一月二十二日」で、「このとき松本清張は朝
日新聞九州支社には入っておらず、小倉の高崎印刷所にいた」

のであり、「森本夫妻の死を職場の人から聞いたとすれば」「死
後二年近く経過してのち」である。平岡は、「とうとう亡くな
りましたね」の「口吻からすれば、森本の死の昭和十一年春
ごろ耳にしていたとも考えられる」と述べるが、その場合、
発言者は「朝日新聞の社員」ではありえない。「断碑」の起源
に位置する森本との接点には一種の霧がかかっている。それ
を晴らす試みは、「断碑」のみならず、清張と考古学の関係お
よび清張文学の方法を考える試金石となる。というのも、清
張にとって「断碑」は「私の考古学物の最初の作品」（全集
「あとがき」）であり、「私の作品に多い主人公の原型は、こ
の森本六爾を書いたときにはじまる」「『断碑』を書いたこと
で、私は文学的にも自分の道を発見したように思っている」
（「わが小説」）と位置づけられているからである。

二

「同じ職場にいた人」や「考古学の好きな朝日新聞の社員」
と語られる人物は、「半生の記^(注8)」では「Aさん」と記される。
「半生の記」の「紙の塵」の章は、朝日新聞社九州支社の社内
模様について転勤にまつわる人事を中心に描き、転動もない
退屈な日々耐えながら、デザイン関係の交流や考古学の趣

味に逃避した日々を回想する。転勤者は、東京からは「めつたになく、ほとんどが大阪からやって」くるが、「そうした人たちには二種類」あり、「一つは若くして転勤し、九州に二、三年もいると」呼び戻される「幹部候補生」、「もう一つは中央では「あまり役に立たない」という烙印を捺されて九州に島流しにされた人たち」で「年輩者が多い」と語られる。その上で次の記述が続く。

校正係主任のAさんが考古学に身を入れていて、よくその話を私に聞かしたものだ。Aさんは気の弱い人で、若い部下からは多少軽く見られていたようである。それで、たまたま机が私と隣合せていたという関係もあって、私とよく話をした。Aさんは、家族が多く、主任でありながらいつも借金に追われていた。ある日、彼の家に遊びに行くと、考古学関係の高価な本が四畳半だかの押入れにいっぱい積み上げられている。ほかに訪ねてゆく者がないとみえ、Aさんはいかにもうれしそうに、蒐集した石器や土器の破片などを次々と出して私に見せた。この人の影響から、私は社のいやな空気を逃れるため北九州の遺跡をよく歩き回った。小遣いをためて京都、奈良を歩いたのもその頃である。

Aさんは転勤組の後者の典型に見える。一方、その「Aさ

ん」が「借金に追われ」ながら、「考古学関係の高価な本」を「積み上げ」て「石器や土器の破片など」を「蒐集」する姿は、「半生の記」では「島流し」組の気晴らしのように前景化されるが、人によっては、その後景に『風雪』の「あとがき」にあった「孤独の抵抗」を嗅ぎ取るのではなからうか。

ここにはなぜか森本の話はないが、「Aさん」がその人であることは確実である。森本と清張を結んだ人物の名前については、「同じ職場にいた人」、「考古学の好きな朝日新聞の社員」、「Aさん」など霧がかかっている。それは、この時期の回想文「自伝抄・雑草の実12」（『読売新聞（夕刊）』昭和五十一年六月三十日）も同じで、「広告部に大阪から転勤した考古学の好きな人」となっている。個々の文章を読んでいるときは、さして気にもならないが、こうして並べてみると、これらの表現が霧として見えてくる。かつて清張の職場であった朝日新聞社西部本社の記者だった小林慎也は連載記事「小倉時代の松本清張12」（『朝日新聞（西部本社版夕刊）』昭和五十六年四月十日）で、社の先輩に当る「Aさん」の名を明らかにしている。

朝日新聞社内の松本清張の隣は、広告部校閲係の机だった。主任は浅野隆、考古学が好きで、休みには近くの遺跡などを見て歩くのを楽しみにしていた。お互いに

社内では「縁の下の力持ち」、自然と話をするようになって。家を訪ねると、収集した土器の破片などがあつた。

「聞き書き」の記事なので、浅野の名は小林によるのか、清張によるのか、微妙ながら、名前の露は晴らされた。おそらくは小林の指摘を受けての清張の発言を引く。

「森本六爾のことを聞いたのは浅野さんから。共感をおぼえた。私の場合、考古学よりもこの考古学者の生き方に興味を持ったのが最初だった」

この後には、同好の士となったことや社内で「そんなことをして何の役に立つか」と嘲笑された思い出が続く。この記事に拠るのか、小野芳美（前掲）も「広告部校関係主任の浅野隆を指す」とし、「半生の記」の「考古学の手引き」を「昭和十四年頃」とする。郷原宏編「松本清張年譜^{（注）}」は昭和十五年の項に「職場の校正係主任の影響で考古学に興味をおぼえ、休日に九州各地の遺跡めぐりを始める」と記すが、「遺跡めぐり」の時期とすれば両者に時期の矛盾はない。ともあれ、昭和十四年前後から清張が近畿にも足を延ばすほどの考古学ファンと化したことは疑いない。

戦時下に北九州一円や近畿に「遺跡」を訪ねる人物が「勉強」なしに漫然と訪ねるだろうか。やがて歴史小説を書き継ぎ、「日本の黒い霧」や「昭和史発掘」などを書く資質の人物

である。自分なりに「勉強」したと考える方が自然である。それに北九州の遺跡にしても、どこに行けばいいのか、それは、だれが、どのように教えるのか。最も便利なガイドの一つに森本六爾編『日本青銅器時代地名表』（岡書院、昭和四年六月）がある。この本を利用すれば、たとえば「鞍手郡宮田町磯光」に「石剣」の遺跡があり、「人類学雑誌」九十八号に報告がある、「鞍手郡若宮村金丸」にも「銅剣」の遺跡があるので、二つを一日のコースで回ろうといった計画が容易に立てられる。「北九州の遺跡をよく歩き回」るためには、こうした著述による「勉強」と情報が不可欠である。

「紙の塵」の章の結びは、「一時の気休め」「小さな趣味」と自嘲しつつも、相応に「勉強」したことを伝える。

二度目の召集令は、六月の暑い日に突然やって来た。明日指定の地に行くとうとき、私は貧しい本箱を開いて、自分の蔵書に判を捺した。数多くない書籍だが、いずれも私にとっては愛着のあるものばかりだった。私が死んでしまえば、これらの本は知らないところに散ってゆく。それを惜しむあまりに、急につくらせた蔵書印を一冊ずつ丁寧に捺したのだった。

小林の記事が晴らすのは、名前の露だけではなかった。浅野隆の名前を通じて「断碑」の起源となる清張と森本との接

点の靄をも晴らしている。考古学の趣味を吹き込んだのが浅野であったとすれば、清張が「勉強」したのは森本の考古学だったに違いないからである。少なくとも森本の考古学に触れずに「勉強」したとは考えられないのである。

三

浅野隆は、森本が創立した東京考古学会の早い時期からの会員であった。東京考古学会は「断碑」の「中央考古学会」に、機関誌「考古学」は作中の「考古学界」に投影している。「考古学」第一巻第一号の創刊は、昭和五年一月であるが、第二巻五・六号合併号の「考古学」（昭和六年十二月）には、「昭和六年十二月現在」の「会員名簿」があり、その中に「尼ヶ崎市竹谷町二ノ四七 浅野隆」と見える。当時は、朝日新聞大阪本社勤務と推測される。なお、「考古学」第四巻第十号（昭和八年十二月）巻末の「編輯所日記」の「十月廿一日」の項には、「浅野隆氏転居御通知あり。」の一文があり、あるいは、この時期に大阪本社勤務から小倉の九州支社に転じたのかも知れない。いずれにせよ、会員として「考古学」の購読を続けていたことが分かる。

「半生の記」の「Aさん」が浅野隆なら、「いかにもうれし

そうに、蒐集した石器や土器の破片などを次々と出して私に見せた」ことは確実であろう。それは「ほかに訪ねてゆく者がない」からではなく、森本の考古学が、「石器や土器の破片など」をテキストとして読む考古学だったからであり、弥生式土器から原始農業を構想した森本の考古学にとつて、「弥生式土器に於ける二者」（「考古学」第五巻第一号）に代表されるように「遠賀川系土器」を産する北九州は、とりわけ重要で魅力的なフィールドだったからである。たとえば浅野の典拠を報じた「編輯所日記」の翌々日になる「十月廿三日」の項にも「田中幸夫氏より、遠賀川流域土器小包にて到着す。」とあり、その後、十一月にかけて小林行雄とともに「土器の破片を縁側に並べ」たりして整理したことが分かる。北九州の「遠賀川流域土器」の「破片を縁側に並べ」て考察する考古学者（森本）の愉快は、「いかにもうれし」そうに、蒐集した石器や土器の破片などを次々と出して私に見せた」東京考古学会の会員（浅野）を介して清張にも共有され、だからこそ家族も仕事も持つ三十男が「遺跡めぐり」で北九州一帯や近畿にも足を延ばすようになったのではないか。

浅野の「影響から（略）北九州の遺跡をよく歩き回った」清張の実践は、最初から森本流の考古学であり、東京考古学会の末端に連なる考古学であった。浅野が「とうとう森本六

爾も亡くなりましたね、夫婦で考古学と討ち死にしたようなものです、と話した」はずはないが、浅野に導かれた清張が「考古学」を読むようになったとすれば、浅野の発言と同趣旨の言葉が深く胸に残ることは十分に考えられる。

というのも、「夫婦で考古学と討ち死にしたようなもの」という発言は、酷似した表現が「考古学」森本追悼号（第七巻第三号、昭和十一年三月）に載るからである。浅野がそれに近いことを言ったとしても、森本追悼号の浜田青陵「森本君を憶ふ」の句を借りてのことであつたに違いない。冒頭を引く。

私共が知つて以来、考古学に関係する人々の受けた一番悲惨な運命に遭遇したのは、実に我が森本君其人であつたと思はれる。僅か数ヶ月前ミツギ夫人が世を去られ、其の墳土未だ乾かざるに、幼弱な遺子一人を残して、自らも夫人の跡を追ひ白玉楼中の人となられたのは、何たる悲惨な事であらう。森本君自身が生前よく云はれて居つた「考古学と共に打死するのだ」と云ふ言葉が、文字通り事実となつて現はれたのであつて、誠に一家を挙げて斯の学に殉じたものである。

「森本君自身が生前よく云はれて居つた」とあるので、追悼文を経由せずに、浅野が聞き覚えていた可能性もなくはない。しかし、その可能性も小さいように思われる。「考古学の殉教

者 森本六爾の人と学問」（注1参照）を著した浅田芳朗は、森本の側近の一人であるが、その浅田にしても、自著のタイトルについて、浜田の追悼文にある「遂に「考古学の殉教者」となられた」の句を踏まえ、「この言葉は、浜田博士が追悼文で述べられた悲痛な響をもつもの」と述べている。浅田にして、そうであるなら、「考古学と共に打死する」「考古学の殉教者」という人物像は、それを浜田が追悼として刻んだ事実と相まつて人々の胸に刻まれたものではあるまいか。

「どうして」「いつごろ」読んだのかという藤間の執拗な問いに対し、清張は、上京後の取材先である中島利一郎の名を挙げ、「あの「考古学」の雑誌は、たしか、中島さんからお借りしたと思います」と言っている。森本夫人の叔父である中島は「断碑」に小山貞輔として登場し、会員でもあるので、当然「考古学」は所蔵していたであろう。ちなみに、「断碑」の主人公の妻の旧姓は久保シズエだが、中島の当時の住所「世田谷久保」に由来しよう。先述した「編輯所日誌」と「編輯所日記」との照応からも、「断碑」執筆時に「考古学」が傍らにあったことは確実である。ただ、それをもって「どうして」「いつごろ」の霧が晴れるかどうか。考古学との接点を語る発言を発表年時の早い順から引く。

同じ部署にいた人が考古学に興味を持っていて、何か

と私に話してくれた(略) 私は森本六爾のことを調べはじめた。(「わが小説」)

校正係主任のAさんが考古学に身を入れていて、よくその話を私に聞かしたものだ。(「半生の記」)

考古学の好きな朝日新聞の社員がいて、森本六爾もとうとう亡くなったといった。(略) はじめはこれに小説的な興味をもった。それでいろいろ聞いてみると(対談「古代史の謎を探る」)

広告部に大阪から転勤した考古学の好きな人があり、その話から手引き書を買ったり、民俗学の雑誌や歴史書を雑読した。(「自伝抄・雑草の実」)

同じ人物についての同じような回想であるが、傍線のような関係において、清張が東京考古学会の「考古学」を見なかつたと信じられるだろうか。とりわけ森本追悼号を「断碑」執筆時まで見ていなかったと信じられるだろうか。

小説「断碑」の起源は、清張が浅野隆に導かれ森本六爾を知り、「考古学」などを通じて森本の考古学の仕事や生涯に接し、とりわけ森本追悼号に深く打たれたことにあると考える。そして、その密かな痕跡は、土器についた糊痕のように「断碑」に癥痕として残っている。

四

「断碑」の冒頭は次の一文に始まる。

木村卓治はこの世に、三枚の自分の写真と、その専攻の考古学に関する論文を蒐めた二冊の著書を遺した。

この一文が、太宰治の「人間失格」の冒頭「私は、その男の写真を三葉、見たことがある。」を連想させることについては、田中実や平岡敏夫(注6参照)の指摘がある。たしかに酷似しており、その酷似がすぐに連想できるほど印象深い書き出しではあるが、その場合、パロディにでも仕立てなければ、結局は先行の「人間失格」を担ぎあげるだけである。「人間失格」は「展望」(三十〜三十二号)の連載も、単行本『人間失格』(筑摩書房)の刊行も昭和二十三年で、「風雪断碑」のほんの六年前になる。「風雪断碑」発表時には、すでに文庫(新潮、創元、河出など)や種々の作品集や全集に収められ、読書家には周知の作品であった。その上での書き出しとすれば、あまり上策ではない。

しかも田中(注10参照)が言うように、「断碑」は「人間失格」ほど「手が込んであるわけではない」し、平岡(注6参照)が言うように「人間失格」が「三冊の手記の伏線的手法

を示している」のに対し、「断碑」は「木村卓治像の伏線的手法とみてよい」といった程度にとどまる。つまり、「人間失格」の模倣とすれば、模倣した上で、効果のほども及ばないとすれば、むしろ下策に近い。

この冒頭は、たんなる模倣というより、いかにも容易な模倣をよそおいながら、その実、清張にとって森本六爾との邂逅において決定的だった「考古学」の瘢痕なのではないか。「断碑」の三枚の写真は、その通りの順序で「考古学」第七巻第三号に掲載されている。「断碑」の本文（引用①、②、③）と「考古学」誌上の写真を掲げる。

①「一枚の写真をみると、ベレー帽を被った斜め向きの半身像で、考古学徒というよりも、画家か詩人の感じがする。」



〔「考古学」森本追悼号の追悼文の扉〕

②「一枚は鎌倉の大仏を背景にしたもので、友人と一緒である。」



〔「考古学」森本追悼号の浜田青陵「森本君を憶ふ」の挿入写真〕

③「あとの一枚は、巴里パリのどこかの地下鉄の入口らしい階段の所で、これはひどく弱々しい微笑をしている。」



〔「考古学」森本追悼号の中谷治宇二郎「巴里と森本君と私」の挿入写真〕

三枚とも丸々一頁分を割いての掲載で印象に残る。一枚目

の写真は、「考古学」第七卷第三号の追悼文の扉に当り、写真の右に縦書きで「愛する魂よ、不滅の名なぞ獲ようとは努めるな、人の為し得る業の深奥を究めよ／ピンダロス ピチツク第三」とあり、下には横書きで「故森本六爾／追悼文／附主要論文概要」とある。同じ写真は、七周忌に東京考古学会が編んだ森本の論文集『日本考古学研究』（桑名文屋堂、昭和十八年一月）巻頭にも掲載され、遺影として位置づけられる。「断碑」の先の引用①に続く「広い額と、出ばつた顴骨と、短い顎という顔の輪郭の中に、つりあがつた眉と、眼鏡の奥の切れながの白い眼と、多弁な薄い唇とがおさまっている。見るからに精悍な、短気な顔をしている」の記述は、広告意匠を仕事にしていた人ならではの要領を押さえたスケッチぶりで、写真の印象とそう隔たりはない。

二枚目の写真は浜田の追悼文「森本君を憶ふ」の記事内容と深く関わる。その部分を引く。

昨年の春未だ浅い四月の某日、私はゆくりなくも島村翁と共に森本君を鎌倉に訪れる機会に恵まれた。(略)君の請にまかせて、美男におはす大仏と蘇鉄を背景として、境内の写真師に撮影せしめた。其の時三人では縁起が悪いと君が云つたので、写真屋の女を一人容れて写したことであつたが、此の縁起直しも役に立たず、これが私と

一緒に写真を撮つた最初の、而かも最後の悲しい名残となつた。

「四月の某日」は浜田の記憶違いである。写真には「三月二十三日 土 湯を立て、浴後髪を洗ふ。濱田先生・島村孝三郎氏と共に鎌倉に遊ばれ、主人もお伴申上ぐ。(後略) (森本ミツギ 編輯所日記)」と付され、「考古学」第六卷第四号(昭和十年四月)の「編輯所日記」にも同じ記事がある。その一日前の「三月廿二日」にも「夜浜田博士より来電あり。明日鎌倉に来らる、由、一家思ひ設けぬ喜びに心躍る。」とある。「思ひ設けぬ喜びに心躍る」記念写真が、「断碑」では、女性の姿がない「友人」との写真になり、それも「卓治は眼を据え、口をへの字に曲げて顔をつき出し、ステッキを斜に構えて、昂然といつた恰好」と写真の森本とは違う印象になる。「考古学」の写真には「右 森本六爾氏 中 浜田耕作博士 左 島村孝三郎氏」とあつて紛れようもないが、「断碑」の描写は、中央でステッキを斜に構えている浜田の雰囲気に近い。

三枚目の写真も、中谷治宇二郎の追悼文「巴里と森本君と私」と関わる。「断碑」では「N」として登場する中谷は、写真の前の頁で、二人が「一日一度は必ず連立つて大学都市の食堂へ行き、秋の日射の温い時には、前のモンスリー公園を永く散歩し」と述べている。写真にも「すみきつた天空で

太陽がすべるやうにてらしてある日には、私たちの心も踊りたい位に晴れ／＼する。そんな時は朝飯にすふキヤフエさへ甘い。人々はルクサンブルクの公園に、また手短かなモンスリー公園のベンチに腰をかける」云々と森本「巴里の秋」からの引用文がある。写真自体は「断碑」に言うように「巴里のどこかの地下鉄の入口らしい階段の所」に見えるが、「考古学」誌上の文脈では、「誰も見知つた者の居ないこんな場所」での「いかにも頼りげなく寂しい」写真ではなく、中谷とのパリでの楽しい日々の記念となっている。

なお、中谷の記事は、「断碑」のパリ留学の記述の典拠であり、「Nは巴里での卓治の様子を日本の知人にこう知らせている」以下の一段、具体的には「六月の終り、私は医者の方へ行つた。木村卓治も同行した」以下は、中谷の「六月の終、私は友人のゲーノー医者の許へ行つた。この時も森本君は同行して」以下を踏まえる。

森本追悼号の写真は、その文脈に紛れがない。それだけに「断碑」における写真の読み替えは、きわめて意図的な原典離れになっている。一枚目の扉の写真と違って、二枚目と三枚目の写真は、それぞれ追悼文の具体的文脈を背負っており、そのままの投影は「孤独の抵抗」というモチーフにとつて、まことに不都合なことになる。「孤独の抵抗」に沿う追悼文の

要素は撰取しつつ、三枚の写真については、元の文脈から切断し「孤独の抵抗」に沿う方向で読み替えている。

こうした撰取と切断は、表現の細部にも及ぶ。一例を引く。主人公の妻の葬儀で「棺は鯨幕を張つた卓治の実家を出た。劍が賑かなので喜んで笑い廻つていた。その同級の一年生が女の先生に引率されて、道傍に並んで棺を礼拝した。」と、いかにも小説的な情景描写がある。しかし、これは浜田の追悼文の「黒い幔幕が其の門前に垂れこめ、香煙と読経の声の漂よう中には、遣子鑑君が何も知らずに笑ひ廻つてみられる。そして其の同窓の小学生が、女の先生に伴はれて礼拝に来る。」を撰取する一方で、それを森本の葬儀から切断し妻の葬儀の場に転用しているのである。

「考古学」から「断碑」への投影は注5の図録にも紹介があるが、ともかく先の写真の例も含め、本作は「聞き書きである小説をつくつた」という以上に、あるいは、それ以前に、「考古学」が基本的な母胎となっている。

実際、「聞き書き」と言いながら、「聞き書き」の当事者であった藤森栄一（注1参照）は次のように述べている。

「断碑」の木村卓治は、私の接したことのない、冷たい、むしろ残酷なほど無残な、ねばっこい人の影像だった。材料も、私がしゃべった溺れるような師弟の愛情の

追憶などは、ほとんどカットになって、また、ミツギ夫のあたたかい愛情の生活などは、いっこうに出てこなかった。

「聞き書き」の当事者ではないが、この種の違和感については、浅田（注1参照）にも次の証言がある。

松本清張の『断碑』に拠るに、森本さんは京都帝国大学の梅原末治博士のことを蔭では「梅原君」と言っていたように伝えられ、それを告げ口する人があって、博士の心証をそこねたと言われている。しかし、私は森本さんが「梅原君」と言われるのを一回も聞いたことがない。森本さんは、いつも、三宅米吉・鳥居龍藏・浜田耕作・高橋健自の四方を「先生」と呼びし、後藤守一・西村真次・梅原末次・坪井良平さんらを「さん」といい、直良信夫・中谷治宇二郎（略）の諸氏には年齢差が少いところから親近感をこめて「君」といわれ、使い分けをされていたように憶う。

「断碑」の主人公の造型は、当の森本追悼号に散見するそれに近い。たとえば、「氣を負ひ功を急ぐ青年の、客気に満ちた人」（浜田青陵）、「君はその社会生活に於いて相当に批難のあつた人であり、自分などは森本君については寧ろその方面の事柄を聞かせることが多かつた」（肥後和男「森本君の学

問について）、「忌憚なく云へば故人の性質には可成人と相容れぬ点がないではなかつた。狷介不羈といふ言葉が果して適切であるかどうか、そんな気分のところが多分にあつた。（略）始めは理解ある温顔を以て彼を迎へた人が、やがて彼の異常な進歩に内心畏怖して、嫉妬の白眼を向けるやうになつた例は一、二ではなかつた。」（坪井良平「森本君と私」などである。追悼文にしては思い切つたことまで語る人物評の方が、藤森などからの「聞き書き」より、はるかに作中の人物像に近い。その点でも、「私の作品に多い主人公の原型」（わが小説）である「私なりの彼」の母胎も、「考古学」にあつたと見られるのである。

「考古学」以外では森本の著述の投影もある。作中に名称がある二十三編の著述の全てが、森本の著述に拠っている。以下は一覧である（前者が「断碑」中の文献名）

- ①『日本農耕文化の研究』↑『日本農耕文化の起源』（藤森栄一編、葦牙書房、昭和十六年八月）、②「大和の家型 埴輪出土の二遺跡」（『考古学論叢』第十三卷第三号）↑「大和に於ける家型埴輪出土の二遺跡について」（『考古学雑誌』第十三卷第一、二号、大正十一年九、十月）、③「大和高市郡畝傍銀杏塚古墳調査報告」↑「大和高市郡畝傍イトノクモリ古墳調査報告」（『考古学雑誌』大正十二

年九月)・「大和磯城郡柳本大塚古墳調査報告(梅原末治共著)」「考古学雑誌」同四月)、④「大和磯城郡田井村の古墳出土品について」↑「大和大淀町の石器時代遺跡について」(「歴史と地理」大正十二年六月)、⑤「大和北葛城郡中尾村の一古墳」↑「大和北葛城郡新庄村の一古墳」(「大和史学」大正十三年七月)、⑥「変形の陶棺を発見したる大和国生駒郡山田村横代の遺跡について」↑「異形陶棺を発見したる大和国生駒郡伏見村宝来字中尾の遺跡について」(「考古学雑誌」大正十三年二月)、⑦上京後「考古学論叢」に掲載した三つの調査報告↑「大和に於ける史前の遺跡1〜3」(「考古学雑誌」大正十三年七〜九月)ほか、⑧調査報告書「足立山古墳の研究」↑「金鎧山古墳」(雄山閣、大正十五年十二月)、⑨「多紐細文鏡研究」(「考古学界」)↑「多紐細文鏡考」(「考古学研究」昭和二年七月)、⑩「銅鐸の型式分類」↑「銅鐸の型式分類と播磨神種例の占むる位置」(「考古学雑誌」昭和五年十月)、⑪「日本青銅器時代考」↑「日本青銅器時代地名表」(岡書院、昭和四年六月)、⑫「飛行機による考古学」↑「飛行機と考古学」(「考古学」昭和六年四月)、「空からの考古学」(「武蔵野」同十一月)ほか、⑬「日本における農業起源」↑「日本に於ける農業起源」(「ドルメン」

昭和八年九月)、⑭「弥生式文化と原始農業」↑「弥生式文化と原始農業問題」(『日本原始農業』東京考古学会、昭和八年十一月)、⑮「低地性遺跡と農業」↑「低地性遺蹟と農業」(『日本原始農業』)、⑯「三河発見の粉痕ある弥生式土器」↑「三河発見の粉痕ある弥生式土器」(『日本原始農業』)、⑰「弥生式土器に於ける二者」↑「弥生式土器に於ける二者」(「考古学」昭和九年一月)、⑱「大和の弥生式土器」↑「大和の弥生式土器」(「大和石器時代研究」昭和九年一月)、⑲「稲と石庖丁」↑「稲と石庖丁」(「考古学」昭和九年三月)、「考古学評論」同十二月)、⑳「農業起源と農業社会」↑「農業起源と農業社会」(「考古学評論」昭和九年十二月)、㉑「煮沸形態と貯蔵形態」↑「煮沸形態と貯蔵形態」(「考古学評論」昭和九年十二月)、㉒「日本古代生活」(歴史講座の企画本)↑「考古学」(歴史教育講座、昭和十年五月)、㉓「弥生式石器と弥生式土器」(遺稿)↑「弥生式石器と弥生式土器」(「考古学」昭和十一年二月追悼号掲載口述遺稿)

短編にもかかわらず、これだけの著述を典拠に基づき反映する。それは、清張がいかに森本の仕事の勘所を押さえていたかを伝えると同時に、森本の考古学への清張の尊敬とその前提としての「勉強」をもの語っている。

五

「断碑」に残る種々の癡痕から何を讀むべきか。「断碑」の作品論として展開する紙幅はないが、一点だけ確認しておく。

清張にとつて森本とその考古学は、会社の同僚から偶然に聞いた一時的な挿話などではなく、東京考古学会会員の浅野隆を介して、自らも森本の考古学を吸収した可能性が高いという一点である。その癡痕は、「断碑」のみならず、たとえ作家以前の「昭和二十二、三年ごろ」、「九州の本屋の棚」で藤森の『かもしかみち』^(注1)(葦牙書房、昭和二十一年十二月)を見つけ「大変に面白い」と思った体験などからも感じられる。そうだとすれば、「断碑」の起源にある森本との邂逅は、清張の後年の創作活動の母胎として再考されるべきである。というのも、森本の考古学の特色は、癡痕から、その背後の社会や生活や文化を讀むことにあったからである。「考古学物」の次作「石の骨」(別冊文藝春秋、昭和三十年十月)のモデルで、「断碑」取材先の一人でもある直良信夫は、森本の考古学の特色を次のように述べる。^(注2)

森本君は、実体とその影との関係を考慮して、その影から実体を把握するのが考古学という学問でなければな

らないというのだった。ここで影というのは、遺物や遺跡、実体というのは既にこの世から消え失せてしまった文化だというのである。一見妙なへりくつのようであるが、かみしめてみると、なんともいえない味わいのある言葉ではないかと思う。

「遺物や遺跡」を「実体」ではなく「影」と捉え、「既にこの世から消え失せてしまった文化」を「影」ではなく「実体」と捉え、両者の「関係を考慮して」「消えてしまった」「実体」を構想する森本の考古学の特色は、ほとんど清張の後年の文学の方法を言い当てている。こうした方法が、その効果を最大限に發揮するのはミステリーの領域であろうが、ミステリーに限らず、歴史小説、評伝、ノンフィクションなど、清張の創作の根には、「影」と「実体」との「関係」から「消え失せてしまった」ものを讀み、それを再現的に物語化する力が広く働いている。

とすれば、清張が「考古学物の最初の作品」や「私の作品に多い主人公の原型」と語る「断碑」の起源は、その水準を超えて「文学的」な「自分の道」の「発見」に連なる意義を孕んでいたと考えられるのである。

注

注1 在野の考古学者。明治三十六年三月二日生れ。昭和十一年一月二十二日没。伝記に藤森栄一『二粒の粿』（河出書房、昭和四十二年十月、のち『森本六爾伝』、浅田芳朗『考古学の殉教者 森本六爾の人と学績』（柏書房、昭和五十七年十二月）などがある。

注2 「あとかぎ」（『松本清張全集35』文藝春秋、昭和四十二年七月）。

注3 「わが小説^⑭」断碑」（『朝日新聞（東京版朝刊）』、昭和三十六年十一月十七日）

注4 「作家の眼・歴史家の眼 古代史の謎を探る」（『歴史評論』二二三号、昭和四十五年一月）

注5 『新進作家 松本清張 取材に走る』（北九州市立松本清張記念館、平成十九年八月）。同図録は、ほかにも、雑誌「考古学」と「断碑」の記述との照応関係を指摘している。

注6 「松本清張研究」第七号（北九州市立松本清張記念館、平成十八年三月）

注7 「断碑」論——藤森栄一『森本六爾伝』と共に——（『松本清張研究』第六号、北九州市立松本清張記念館、平成十七年三月）
「半生の記」（『文藝』昭和三十八年八月〜四十年一月）。引用は『松本清張全集34』（文藝春秋、平成六年十一月七刷）所収本文に拠る。

注9 郷原宏編『松本清張事典決定版』（角川学芸出版、平成十八年五月再版）

注10 田中実「断碑」覚え書」（『松本清張研究』砂書房、平成九年八月）

注11 『かもしかみち』（学生社、昭和四十二年七月）に寄せた清張の帯文。

注12 注1の浅田書の「序」。

（まつもと つねひこ・九州大学大学院比較社会文化研究院教授）